

応援まとめシリーズ

虎子さんの虎の巻



もくじ

虎子プロフィール	1
虎子プロローグSS	2
ファントム野郎Aチーム	15
ゆにぼちゃんと『からっぽのえいが』	16
続・ゆにぼちゃんと『からっぽのえいが』	18
探偵Gの事件簿～せいきの大泥棒編～ガウ☆	26
ガールズ&パンツァー(前編)	31
無題(コブラ部隊コピペ)	36
ガールズ&パンツァー(後編)	37
虎子戦績	43
虎子エピローグSS そして、	44
あとがき	45



とらこ
虎子プロフィール

- 性別 …… 無性
- 学年 …… 1年
- 所持武器 …… 虎の子の虎の巻
- ステータス …… 攻撃力:12 防御力:1 体力:5 精神力:3 FS:9
- FS名 …… 片想いの年数

特殊能力名:傷んだ赤の白昼夢

効果:遠距離通常攻撃 60
効果付属:壁貫通 10
効果付属:凄惨な死 10
範囲+対象:斜め2マス一人 ×1.5
時間:一瞬 ×1.0

タイプ:瞬間型
スタイル:アクティブ

消費制約:永続行動不能 40

FS:9 ×1.9

効果数値:60×1.5=90
発動率:(100-90+40)×1.9-20=75%

発動率:75% 成功率:100%

能力原理

虎の子の虎の巻(兵法書兼アルバム)を広げ、巻末の父の写真を見る。

その行動をトリガーに、全盛期の虎子の父が戦場に一瞬だけ顕現し、得意のナイフ格闘術で敵を切り刻む。

虎子はその勇猛な様を見て泣き崩れ、動けなくなる。

キャラクター説明

父親に対して強い愛着を持つ女の子。

虎耳、虎尻尾、虎グローブ、虎ブーツ、猛虎猛進のロゴTシャツ、虎の字の入った偽名、そしてたまたに忘れる特殊語尾の「ガウ☆」が特徴。

ふざけた外見と語尾に反し知性派。

戦闘スタイルは父親仕込みのナイフ格闘術。

「あなた達の行動はわたしが事前に予測した48パターンの1つと全く同じ。

対策は……………検討済みガウ☆」

■ 虎子プロローグSS ■

○9年前○

「パパ！」

柔らかな光差し込む一戸建て住宅のリビングにて、幼い女の子が200字詰め原稿用紙を元気よく差し出した。その原稿用紙の1行目には「わたしのしょうらいのゆめ」と、丸く拙^{つたな}い字で書かれている。

「ふふふ、学校の課題ですか？」

虎柄のハイセンスな1人掛けソファーに深く腰掛けたまま、差し出された原稿用紙を丁寧に両手で受け取った成人男性。その男性の腕と腕の隙間をスリとくぐり、そこが定位置であるかのように彼の足間に座った女の子。

二人は揃って原稿用紙に目を落とす。

「はやく！ はやく読んでみてください！」

可愛い娘に急かされ、男は音読をはじめた。

『わたしのしょうらいのゆめ 1ねん1くみ ■■■ ■■■』

わたしのしょうらいのゆめはけいさつかんになることです。

おとうさんのようなかっこいいけいさつかんになりたいです。

おとうさんはわたしとおかあさんをまもってくれるのでかっこいいです。

けいさつかんのふくもかっこいいです。

ひげはちょっときらいだけどがまんです。』

作文を読み終わり、小さく男は笑った。

夢という主題からややズレた作文の内容も、それに対する「すてきなおとうさんですね！」という担任の投げやりなコメントと花まるも、娘が自分を慕^{した}っているという事実も、何もかもが微笑ましかったのだ。

———魔人犯罪者達が名を耳にすることすら忌避^{きひ}する鬼の魔人公安■■■■。この男、公安組織を武力面から支える精鋭魔人衆^{ごきょうごしき}“五行五色”の一角に名を連ねし“炎の赤”^{■■■■■}は、この時この場においてのみ、どこにでもいるありふれた“z幸せな父”であった。

「そうですか、■■さんは警察官になりたいのですね。」

「えへへへ。」

照れくさそうに少女は頭上に位置する父の顎^{あご}を手の甲で撫でる。シャリシャリと髭^{ひげ}と手とが擦れ、音を立てる。

「……フーム、しかし。警察官はあまりオススメできるお仕事ではないのですが、考え直してはいただけないでしょうか？」

髭を擦られながら、神妙な面持ちで男は言う。

「えー！ なんです！？」

「警察官というのは豚にも劣る下種^{ゲス}共を……つと。」

不治の病のように心に深く根付いた魔人犯罪者達への憎悪をポロリと口にしかけて、娘の情操教育上良くないと男は言葉を選びなおす。

「—————そうですね、警察官というのは“悪い方”達を相手にするお仕事なのです。“悪い方”は当然“悪いこと”をしますし、それを成そうする手段は多くの場合暴力に依ります。私は、■■さんに危ない目に遭^あって欲しくないのですよ。」

その経験から来る真摯^{しんし}な忠告を受け、少女の大きな瞳がしばしばと瞬^{まばた}く。きよとんと、首を後ろに大きく反らして見上げる少女の視線と、優しく見下ろす男の視線が交わる。少しおいて、心底不思議そうな声色で彼女はこう言った。

—————あぶなくなっても、パパがまもってくれるから大丈夫ですよ？

○ハルマゲドン開戦日○

数時間後に迫った番長グループとの対決に向けて賑わう“武装生徒会室”。東西2棟に分かれた校舎の西棟、その4階から5階までを占める生徒会領、通称“生徒会城”の最奥最上部^{さいおう}に位置する“生徒会天守閣”こと“武装生徒会室”。そこに集うは精鋭の生徒会役員、上納金で雇われた臨時戦闘員、メカ、アキカン、触手、全裸など、個性豊かな総勢二十余名の魔人達。

粛清^{しゅくせい}・処刑という大義名分^{もと}の下、己が力を知らしめんとする者、爆発の末に果てたいという願望を胸に秘める怪人、戦いの中で福祉の真理を極めんとするヘルパー、各々が決戦^{おのおの}へ向けやる気に満ち溢れている。室内に蓄積され続け、今か今かと外へと飛び出す機会を伺う熱気が、これから始まるであろう全力の大闘争を否が応でも想起させる。

そんな中、酷くおどおどとした振る舞いの少女が、虎のような奇天烈^{きてれつ}な出で立ちをした“大親友”におずおずと遠慮がちに話しかけた。

彼女の名は“十葉^{とやく}シブキ”。

高校生活初日、極端に内気な彼女に話しかけてくれたその虎のような少女に対し、愛情よりも深い“友情”を抱いている盲目^{いちず}一途な魔人だ。彼女は“大親友”の為ならば、たとえ火の中水の中、いつでも命を投げうつ覚悟を持つ。ちょっとだけ、想いがヘヴィーだ。

「い、痛そう…。 “ココ”ちゃん、それ……大丈夫？」

“ココ”と呼ばれた少女の頬には、ごく最近できたであろうことが窺^{うかが}える青痣^{あおあざ}があった。

「ふふふ、よくぞ聞いて下さいました。これは特訓の勲章でガウ☆」

軽妙に答えたココこと“虎子^{とらこ}”。

特殊語尾の「ガウ☆」に合わせてネコのようなあざといポーズをとる。

彼女は食客参謀^{しょつかくさんぼう}として生徒会に囲われた無所属魔人であり、萌え萌えキュンなテイストが過ぎて思わず殴りたくなるような痛々しい虎のコスプレからくる馬鹿っぽいイメージに反し、大変切れる頭脳とナイフ格闘術を有している。

その彼女^{いわ}曰く、本日のハルマゲドンに向けて魔人公安である父と二人で、攻撃力を上げるための秘密特訓を行っていたのだという。また、その過程で青痣ができてしまったのだと。

「攻撃力を10から2上げることで、しゃらくさくステメタ制約対策に防御力に振っているアタッカーを命中判定で躓^{つまづ}くことなく確殺^{かくさつ}できるのです！ …じゃなかった！ できる『ガウ☆』というメタ的な特訓解説に、シブキは「よく分からないけどスゴい」と思った。

「————……でも、」

「ガウ？」

シブキの小さな手が、おそろおそろ青痣の上に添えられる。

「い、痛そうなことに……変わりない…。」

傷を刺激しないように細心の注意を払いつつ、やわやわと頬を撫でるシブキ。まるで幼子^{おきなご}に対する「痛い痛い飛んで行け」というおまじないのように。

その行為に意味は無い。シブキは癒しの魔人能力など持っていない。それでも彼女は、傷んだ“大親友”を前に何かせずにはいられなかったのだ。

「くすぐつたいガウ☆」

そのような優しさに触れて、虎子ははにかむ。

————しかし、

和やかな表情に反して、その瞳は暗く冷たく濁っていた。

○ハルマゲドン開戦前日○

「あっ あっ モットモ あっ カンタッ…カンタ あっ あっ あっ あっ あっ あああっ ツアアアアア
アア——————ツ!!!」

遮光カーテンで閉ざされた一戸建て住宅のリビングに、枯れた低い男の声が響く。昼間だとい
うのに室内は薄暗く、部屋の中央に置かれた52インチの薄型テレビのみが光源となっている。

テレビの前のくたびれた虎柄のハイセンスな1人掛けソファーに、脱力した様子で体を預ける男性
が1人。奇声の発生源であるその男は、ソファーと同様にくたびれている。年齢は40代後半といっ
たところであろうか。そしてその背後に虎のような奇天烈な出で立ちをした少女が1人。

「パパ、わたし……………。ハルマゲドンに行ってくるガウ☆」

奇声と奇声の合間を縫って、少女は告げた。

「—————イイイイイ————ツ!! イチイ…イチチチチチ…………! イチガ…イチガ……ワル…カタ
ネ…………。」

その言葉に対する反応は男から得られない。

変わらず意味不明の奇声を上げるのみである。

その様子を「いつものこと」と受け止め、少女は視界を遮らないよう背後から男性に寄り添い、
静々と彼の上着のボタンに手をかけた。

「オッ…レガ……サンニン……………ブツ…ンツ…。」

呟きこそ止まないものの、抵抗することなく男はそれを受け入れる。上着を慣れた手つきで脱が
せた少女は人肌の温かさの濡れタオルで男性の体を拭きつつ、粘り強く言葉をかける。

「ハルマゲドンは生徒会と番長グループの魔人達による一大抗争ガウ☆ 生きて戻れるか分からな
いガウ☆」

「ケキヤキヤッ! オレオレオレレデナッキャ! ノノガシチャウネエ————ツ!!!」

噛み合わない会話を気にすることなく体を拭き終わった少女は替えの清潔な上着を手慣れた様
子で着せる。

「それで、暫く家を空けるガウ☆」

ぷすりと、的確に点滴の針を男の腕へと挿入しながら彼女は言った。チューブの先は栄養剤へと
つながっている。これで最低1週間は衰弱死の心配がない。

「もしわたしが戻らなかったら、その時は親切な人が迎えに来てくれる手筈を整えておいたガウ☆」

一定時間操作をしなかった場合、自動で魔人精神病院(※精神を病んだ魔人を収容する専用の
病院)に出動要請のメールが送信されるよう、簡単な命令式が虎子のノートパソコンには設定されて
いた。

万が一虎子の身に何かあっても、これで男の生は確保される。

これにて、出発の準備は整った。いや、整って“しまった”。

今生こんじょうの別れかもしれないというのに、あまりにあっけなさすぎる。

「パパ……………」

依然奇声をあげ続ける父の背後で、特殊語尾も忘れ、少女は悲しげな表情を浮かべた。

○回想○

—————物心ついた時から■■は父に恋をしていた。

明確にそれを自覚したのは9年前、■■が小等部1年生の頃。



授業にて「私の将来の夢」というテーマで作文を書く機会があり、そこで文章化を通して、わたしは父への愛を明確に自覚した……ような気がする。9年も前のことだ、鮮明には記憶していない。テーマに反して「父ラブ！」な内容で埋め尽くしてしまった作文は、今思い返すと少し恥ずかしい。中等部に上がった頃に、父の書斎にて大切にファイリングされていたそれを見つけた時は顔から火が出るかと思った。

誠実で何に対しても真剣だった父は、わたしの「警察官になりたい」という戯言たわごとに真剣につきあってくれた。

「警察官になりたい」というのは件くだんの作文の内容であったのだが、本音を言ってしまえば、そこまですりたかったわけではない。ただ、「父のようにになりたい」「父に近づきたい」という想いは本物で、その発露がそれであっただけだ。

作文を読んだ日から、ナイフ格闘術の名手だった父は、小等部1年生という幼年のわたしに、そのスキルを伝授しはじめた。「母さんは『可愛い娘に何をさせるんですか』と怒り心頭だったが、『護身術にもなるから』とナントカ言いくるめた。」と、父の手記にはあった。

今にして思えば、母の怒りは当然だったと思う。幼気いたいけな6歳児に殺人スキルを与えるなど、控え目にいってもどうかしている。

しかし、当の私には楽しかった記憶しか残っていない。父との訓練は、遊んでいるような感覚だった。よほど父の指導技術が素晴らしいものであったのだろう。

そのスキルの伝授は6年にも渡った。

父が“まともだった”最後の頃の手記によれば「今日の訓練で■■に戦闘面で教えることはもう何も

ないと感じた。あと1年も鍛えれば、私をすんなりと追い越すことだろう。恐ろしい才能、流石は私の自慢の娘だ。」だそうだ。

やめて欲しい、照れてしまう。



—————4年前。

夫婦喧嘩。



父が“こうなってしまう”前兆として、思い返せば様々なことがあったのだが、私が記憶している限り最古のものは4年前の冬の“アレ”ではないかと思う。当時わたしは小等部の6年生であった。

わたしの両親は近所でも評判のおしどり夫婦であった。父を助け、父に愛され、父に欲される母を同性として「羨ましい」と思うことが当時からしばしばあったのだが……まあ、それは今は本筋ではない。ともかく二人は大変に愛し合っていた。

しかし、その日は様子が違った。

深夜のことだったと思う。父と母の怒鳴り声でわたしは目を覚ました。温厚な父と大和撫子やまとなでしこの見本のような母が声を荒げるのを聞いたのはそれがはじめてだった。

悪い夢だと思った。醒さめろ醒めろと願った。わたしはベッドに潜り込んで布団を頭から被り、ブルブルと震えていた。

「5点！」

「教科書！」

「ローゼン！」

何を言い争っているのかは分からなかったが、そんな単語は覚えている。

後に父の手記にて当時の記述を見つけた。大抵、理論立って分かり易く当時のことが書かれている父の手記であるのだが、その日の記述は短く、少々乱暴な印象を受ける。

「ローゼンクロイツも知らない馬鹿女だったとは失望した。ローゼンクロイツは教科書レベルの有名な人物だろう？ 常識を疑う。」



—————3年前。

食生活の乱れ。



中等部1年の7月7日。父の食生活が激変した。

魔人警官という職業上、父は人一倍健康に気を使っていた。常日頃「肉の三倍野菜を食べる」という健康目標の下、それほど好きではなかったはずの緑黄色野菜を我慢して食べていたようだったし、母がスポーツトレーナーも真^{もと}っ青な栄養管理をしていたような記憶がある。

しかし、ある日を境に父はカップ麺しか口にしなくなった。母がどんなに手を変え品を変え豪華な料理を作っても、一切手をつけることはなかった。

そしてある日、父の健康を気遣ってカップ麺に野菜や肉を足そうとした母に対し
「シャラクセエエエエエエ!!!」

と出来立てのカップ麺の中身を浴びせる家庭内暴力を起こした。

母はひどいやけどを負った。

当時の父の手記には連日「ウメーウメー」としか記されていない。もうこの頃から正気を失っていたのだと、わたしは確信する。



—————3年前。

不倫と離婚。



中等部1年の12月15日。父の不倫が発覚した。

相手はマノという男性だった。父はソリノという偽名でニューハーフの副業をやっていたのだそうだ。意味が分からない。

母は心労で倒れた。無理もない。その決定的な事件に至るまでも、父は明らかに異常で、小さな問題を連日起こし続けていたのである。その尻拭いの度に母の心が擦り切れていくのを、わたしは見ていた。

そこにきての不倫、しかも男性相手である。倒れるなという方が無理な話であるし、離婚も当然の

帰結だと思う。

……………しかし、この時。これは墓まで持っていくつもりだが…。不謹慎ながら、わたしはほんの少しだけ喜んでしまった。

母のことは大好きだった。

その母が倒れたことも悲しかった。

しかし、それ以上に父と二人になれたことが嬉しかったのだ。

間もなく、父とわたしの二人暮らしがはじまった。なお、この頃になるともう手記に新たな記述は無い。



—————2年前。

映画。



中等部1年の2月26日。父と二人で、とあるアニメの映画を見に行った。

その頃の父はかなり弱っていたものの、^{ときおり}時折正気を取り戻すことがあった。仕事も不定期だが、調子のいい日は出勤していた。

しかし、基本的に父の異常言動や行動は絶えず、わたしは常々昔のような優しくて聡明な父に戻って欲しいと思っていたし、その為の方策を打ち続けていた。目ぼしい精神医には全て診せたし、父の仕事のツテを利用して回復能力を持つ魔人とも接触した。家でも父がストレス無く過ごせるよう最善を尽くしていた。

まともだった頃、父は虎が好きだった。

「仕事を引退したら退職金で虎を1匹飼うのが私の夢です。」

などと言って、母さんに笑われていた。

正気を失っている時でも、父は虎のモチーフにだけは反応を示した。父が暴れた時、はじめは虎のぬいぐるみであやしていたのだが、繰り返すうちやがて効果は薄れていった。

そこで試しにわたし自身に虎の耳をつけて父に向き合ってみたところ、非常に良好な反応が返ってきた。しかし、それも日が経つにつれ効果は薄れていった。

では次は虎尻尾、その次は虎グローブ。虎ブーツ、猛虎猛進のロゴTシャツ、虎の字の入った偽名、特殊語尾の「ガウ☆」。父が飽きる度に虎化はエスカレートしていき、それに伴いはじめは虎の格好

を恥じらっていたわたしの羞恥に関する感性も薄れていった。

そのような父の正気を取り戻すための方策の一環として、その日私は父を映画へと連れだしたのだ。そのアニメ映画は父が好きだった漫画を原作とした映画で、「良い作品を見せることでリハビリになれば」とわたしは考えていた。

—————今にして思えば前情報の無い公開初日に行ったのは最悪の一手だったと思えるが、当時のわたしは不安定な父との毎日に悪戦苦闘しており、そこまで考える余裕が無かった。前売り券をテレビ台の上において「これでパパが正気を取り戻すといいな〜♪)」などと、公開日を指折り数えて楽しみにしていた自分を縊^{くび}り殺したい。

映画の次の日、仕事場で父は生意気な同僚を「シャラクセエエエエエ!!!」と言って刺した……らしい。幸いその同僚は一命をとりとめた。また、いままでの輝かしい功績のおかげでその件は公安内部で揉み消され、父が犯罪者として魔人監獄^{しゅうかん}に収監されることは無かったのだが、ひとつのケジメとして公安組織を退職する運びとなった。

この時、父は完全な魔人になった。



—————2年前。

父の異常の理由。



勘違いしてほしくないのだが、あの映画が父を発狂させたわけではない。

確かに最後の致命傷を与えたのはあのひどい出来の映画だったかもしれない。

しかし、それ以前から兆候はあって、遅かれ早かれ父は狂う定めだったとわたしは思う。

^{クエスチョン}
「Q . 父が狂ってしまった根本的な理由は何か？」

父が魔人になった以降のある日、私は父の書斎で膨大な量の手記を見つけた。

父はママだった。

母と結婚するよりも遙か前、14歳の頃から30年近く、毎日欠かさずその日あったことを書き留^とめていたようだ。

わたしはそれを寝食を忘れて読み耽^{ふけ}った。大好きな父の心に触れられるのが嬉しかったし、あわよくば父を正気に戻すヒントを掴^{つか}めるかもしれないと思ったのだ。

14歳の頃の父の“ぼくのかんがえたさいきょうののりよく”の妄想はなかなか心躍ったし、大学時代の母との甘く切ないラブストーリーも興味深かった。官僚コースで公安組織に就職した後もじゅんぷうまんぼん順風満帆といった風の毎日が続いていた。

しかし、公安組織の対魔人部署に配属された後の手記は見るにたえなかった。

はじめてそれを読んだ時、わたしは嘔吐した。もう読み進めたくないと強く思った。自分が文字を理解できることを呪ったし、一行読み進める毎に心が1mmずつ刻まれるようだった。

数日かけて、泣きながら、吐きながら、わたしはそれを読み終えた。そして理解した。

アンサー
「A. 父の心は魔人に壊された」

その手記はもはや紙を媒介とした呪いと言っても過言では無い代物だった。

まともだった頃の父が一切わたしには話さなかった、父の仕事に関する記述。

力を持った元人間、“魔人”が力無き者に何をするのか。

決して詳細に報道されることの無い、魔人犯罪者達あくぎょうの悪行。

今でも信じられないのだが、筆舌に尽くしがたい魔人によるせいさん凄惨な事件の発生スパンは週刊少年ジャンプの発売スパンより短いのだ。毎週父は家でジャンプを読んでいたが、その裏でその倍から3倍は凄惨な事件の後処理や解決にあっていたのだという。

そのような果てなき闘争の中で、清廉潔白だった父の心が歪ゆがんでいくのが手記から痛いほど伝わってきた。はじめは義憤ぎふんの炎を燃やして事件にあっていた父も、次第に擦れ、精神を消耗し、魔人への憎しみだけが凝縮された歪いびつな結晶となっていた。憎しみはやがて魔人犯罪者だけでなく、同僚である魔人警官達に向かい、無害な魔人達に向かい、母に向かい、最後は自分自身に向かった。

傍若無人で、嫌らしく、卑猥で、暴力的で、性根が腐っている。そんな 危険 dangerous 世界の住人達、すなわち魔人達に触れて彼の心は砕けたのだ。

魔人警官は正しい心を持った人間がなるべき職業ではない。歪んだ人間にしか続かない。しかし父は、その真面目さ故に逃げ出すこともできず、投げ出すこともできず、危険 dangerous に向き合い続けたのだ。魔人となった今が、ある意味父の正しいゴールだとも思える。

父は昔わたしに言った。

「……フーム、しかし。警察官はあまりオススメできるお仕事ではないのですが、考え直してはいた
だけないでしょうか？」

今ならその真意も、それが心からの言葉だということも分かる。



———現在。



わたしは今でも父が好きだ。

しかし、すこし疲れた。

たかだか3年父を支えただけだ。

介護疲れというには早すぎる。

根性なしと罵^{ののし}ってくれてもいい。

肉体的な疲れはそれほどでもないのだが、ただただ、心が疲れた。

治る見込みの無い父に「もしかしたら」と希望を抱いてしまう自分の懲りなさに疲れた。まともだった頃の父を夢に見て、目覚めたとき泣くのに疲れた。父を想うあまり父の嫌いな魔人に覚醒してしまった自分の馬鹿さ加減に疲れた。能力を使って一時の幸福を得た後の虚無感に疲れた。父の退職金が尽きてからあの手この手で生活費^{ねんしゆつ}を捻出するのに疲れた。奇声を叱りに来る近隣住民に謝り疲れた。父が憎んだ魔人達の中で送る学校生活に疲れた。

———すこし疲れた。

まだまだ戦えるような気もするが、もうダメかもしれないとも思える。何か機会があればわたしは父を、そしてわたしを自身諦めるかもしれない。父のゴールが魔人だったように、私のゴールはそこなのではないかと、最近をよく考えている。



○ハルマゲドン開戦前日○

「パパ……………」

依然奇声をあげ続ける父の背後で、特殊語尾も忘れ、少女は悲しげな表情を浮かべた。

その直後、意を決した^{おもも}面持ちでこれが最後の別れと、彼女は禁を破った。

「—————パパ！」

巨大なテレビ画面と父の間に、彼女は割って入ったのだ。これは、2年近く虎子が侵さなかったタブー中のタブー。

その画面に上映されているのは、その男にトドメを刺した、とある漫画原作のアニメ映画だった。その映画を見ている時のみ、何故か彼の異常行動は沈静化する。

「ア？」

画面を^{さえぎ}遮られ、男がのそりと立ち上がる。180cmオーバーの長身。威圧的！

「ア？」

焦点の定まっていない瞳が虎子を捕える。一瞬、表情筋に力が入り、全盛期のような凛々しい表情が構成される。

その表情を見て、虎子の気持ちが激しく揺れる。

—————（パパが、正気を取り戻した…？）

—————（ハルマゲドンに行かんとするわたしを引き留めてくれるの…？）

『私は、■■さんに危ない目に遭って欲しくないのですよ。』

虎子の脳内に、優しくった頃の父の^{せりふ}台詞がリフレインする。直後、男の両の眼球がグリーンとあさっての方を向き、

「シャラクセエエエエエエエエエ！！！！」

拳が振るわれた。

無防備だった虎子は^{ほお}頬にそれをもらい、容赦なく壁面に叩きつけられる。飾ってあった写真がいくつか落ちた。

「……がっ…… ガウ☆ ガウ☆」

「こうなるのはわかっていた。傷ついてなどいない」と自分に言い聞かせて虎子はヘラヘラと笑い、立ち上がる。そして鼻息荒くソファーへと座り直し、映画鑑賞に戻った父の背後へと寄り添う。今虎

子を殴ったことで外れてしまった点滴を刺しなおすのだ。

それが済み、ふとズキンと痛んだ頬を押さえた時、虎子は自らの異変に気付いた。抑えた右手が濡れたのだ。

(これは、涙……? 泣いているのは……わたし……?)

「ガウ☆ ガウ☆」

虎子は笑った。

その時彼女の中で何かが、決定的な何かが音を立てて切れた。

「行って来るガウ☆」

その声は男に届いていないだろう。しかし、虎子の迷いは晴れた。

死の戦^{いくさ}に向かって足取り軽やかに虎子は歩み出す。

生徒会も番長グループも暴力と自己顕示のことしか頭のない虎子が嫌いな集団だ。属するのはどちらでも良い。コネクションはどちらにもあり、どちらからも呼び声がかかっている。

(—————そうね…弱い方に加担するとしましょう)

自らの軍団指揮能力で弱きを助け、戦力図を拮抗させ、なるべく多くの被害が出るように謀^{はか}ろうと虎子は考えた。害悪な魔人達が沢山死ぬのは良いことだ。そしてその果てに自分も死ねれば万々歳だ。

「ガウ☆ ガウ☆」

暗く冷たく濁った生気の無い瞳が楽しげに歪んだ。

【魔人名 ^{とらこ} 『虎子』】

【真名 ^{ぎばら みやこ} 『偽原 都子』】

【魔人能力 ^{ファントム・スカー・レッド} 『傷んだ赤の白昼夢』】

—————出陣。

■ 虎子プロローグSS ■

※このプロローグSSはフィクションであり、登場する団体・人物などの名称はすべて架空のものです。特定のダンゲロスプレイヤーを中傷する意図はございません。

『ファントム野郎A^{エー}チーム』

映画館で鳴らした俺達ファントム部隊は、濡れ衣を着せられ当局に逮捕された。
刑務所を脱出し、地下にもぐった。
しかし、地下でくすぶっているような俺達じゃあない。
筋さえ通れば金次第でなんでもやってのける命知らず、
不可能を可能にし巨大な理性を粉碎する、俺達、ファントム野郎Aチーム！

俺は、^{あかいきょうじ}紅井叫司。通称レクイエム。

ピアノ戦法と演奏の名人。

俺のような天才音楽家でなければ百戦錬磨のつわものどものリーダーは務まらない。

俺はMr.スカー。通称Mr.スカー。

自慢のファントムに、女はみんなイチコロさ。

ハッキリかまして、とてもおもしろい漫画単行本数十冊から禁じられたDVD1枚まで、何でもそろえてみせるぜ。

よおお待ちどう。俺様こそ^{ぎばらみつよし}偽原光義。通称オンデマンド。

魔人公安としての腕は天下一品！

^{エスエススリー}SS3？ ^{ウォーアンドウォール}W & W のキャラじゃない？ だから何。

^{ぎばらみやこ}偽原都子。通称^{とらこ}虎子。

軍団指揮の天才だ。転校生でもブン殴ってみせらあ。

でも父親だけはかんべんな。

俺達は、道理の通らぬ世の中にあえて挑戦する。

頼りになる神出鬼没の、ファントム野郎Aチーム！

助けを借りたいときは、いつでも言ってくれ。

(Written by ルフトライテル)

ばしんっ！ ばしんっ！

(ちょっとだけっ！ ちょっとだけでいいから大きくしてくださいっ！)

ゆにぼちゃんは^{かしたで}柏手を打ってお祈りしました。

ここは、カベクイグソクムシが仮の住まいとしている小さな池です。誰が作ったのやら小さな祭壇には、少女たちの願いを込めたお供え物がいっぱい。そして、日課のお祈りが終わったゆにぼちゃんは、いつものバイト先とは別方向に歩き出しました。

「さてっ！ ^{とらこ}虎子さんちにむけてしゅっぱっつ！」

■ゆにぼちゃんと『からっぽのえいが』■

ゆにぼちゃんは、一年生の^{とやく}十葉さんから、虎子さんのお父さんの様子を見てきて欲しいと頼まれたのでした。虎さんは頭が良いので、ハルマゲドンの作戦会議に忙しいみたいです。(なんで十葉さんが合い鍵もってるのかな?) ってちょっと思ったけど、ゆにぼちゃんは引き受けることにしました。

虎子さんのお父さんは、心の病気でソファーに寝たきりだそうです。

(^{せいしき}清拭とおむつ交換してあげなきゃ……^{じよくそう}褥瘡も心配だな……)

ゆにぼちゃんは虎セットを身に着けました。虎ミよし。しっぽとグローブよし。ふかふかだけども猛虎猛進Tシャツよし。低周波ナックルの電池も念のため再チェック。満タンよし。

「こんにちはっ！ 虎さんと同じ高校の^{ふくしの}福篠ゆにぼですガウっ☆」

部屋に入るとひどいありさま。ちらかり放題のゴミの真ん中に、点滴を付けたお父さんがいました。

「イヒヤヒヤッ！ ホントウライキヒヤヒヤヒヤッ！」

お父さんは、ゆにぼちゃんに気付きもせずにテレビを見ています。

(これが十葉さんの言ってた『映画』……絵はキレイだよねえ)

ボクってほんとバカ。あれだけ見ちゃダメって言われてたのに。

1秒、2秒、……3秒。

《 ■ ■ ■ ■ ■ ・ ■ ■ ■ ■ ■ 》

老人介護は、ある意味むなしさとのたたかいです。いっしょうけんめいお世話しても、名前すら覚えてもらえないことも多いのです。それに、みんな、じきに死んでしまうのです。それでも、ゆにぼ

ちゃんは少しでも良い気分になってもらいたいと思いがんばってきました。だから、むなしいことには慣れっこなのです。

慣れっこ、なの、でした……。

「うえっ、うぐえええっ、うえうえええええっ！」

虎子さんちのトイレに、ゆにばちゃんの苦しそうな声が響きます。おやつのだーナツも、胃の中のすっぱいものも全部だしたけど、まだえずきがとまりません。その映画はとんでもなくからっぽでした。「なにもない」をお鍋にいれて一週間煮こんだぐらいなものにもありませんでした。

ゆにばちゃんは、やっとの事で十葉さんに電話でお父さんの様子とごめんなさいを伝え、フラフラと家に帰りました。

晩ごはんも食べずに寝ました。

すごく高い熱がでました。

翌朝になっても、熱は下がりませんでした。

はたして、ゆにばちゃんはハルマゲドンまでに元気になれるのでしょうか……？

(Written by ほまりん)



「続・ゆにばちゃんと『からっほのえいが』」

■2:ゆにばちゃんの家 (ゆにばちゃん)■ より一部抜粋

ぎゅむん。

^{とらこ}虎子さんの指がゆにばちゃんのほっぺをりょうほうから押し込みました。むりやり割り開かれたくちびるを目がけて、虎子さんのしんけんな顔が迫って来ます。

(え、え、え?)

これってもしかして、もしかすると……? イヤですおたわむれを。ゆにばちゃんには心にきめたグソクさまがいるのです。でもすごい高い熱のせいで体がぐったりして振り払えません。

これはいけません!

■1:生徒会室■

私立希望崎学園西校舎、最上階^{さいおう}最奥。決戦を数日後に控えた生徒会室は今日も慌ただしい。「会長」「副会長」「会計」「書記」等の称号を持つ上級生徒会役員達に、外部戦略顧問1名を加えた首脳陣が戦略会議^{いそ}に勤しんでいる。

「偵察で得た情報をまるっと信用するなら、番長グループの配備は整いつつあるようです。お手元の資料の2ページ、3枚目のスライドをご覧ください。堅牢な要所、盤石の本陣…敵もそれなりに考えてきたようですね。……しかし、よく考えられた布陣こそ御し易いガウ☆」

外部戦略顧問、^{しょつかく}食客参謀“虎子”が朗々と会議を牽引する。虎子は虎のコスプレのような出で立ちとふざけた語尾に反し、校内指折りの知性を持つ無所属魔人だ。この度のハルマゲドンに際し、生徒会長直々にアプローチを受け、今こうして闘争準備の指揮をとっている。

「次に2ページ、4枚目のスライドをご覧ください。こちらが、番長の予想布陣を考慮した上で、生徒会の戦力を最も効率良く配置した――

――トしろい～ マットのオ～ ジャー(↑)ング～ルウに～～

発言の途中で、虎子のスマートホンが着信音を鳴らした。会議中だが、迷うことなく彼女はそれをとる。そして周囲もそれを容認する。

「ガウ☆ ガウ☆ いつもお世話になっております。……ハイ。……ハイ。わかりました、都合はつけま

すので、納期を守れるよう注力してください。ハルマゲドンに間に合わなければ意味がありませんので。……ハイ。それでは失礼する gau☆」

虎子は戦略会議の進行以外にも、ハルマゲドンに関連したいくつかのタスクを任されている。会議中の通話を周囲が容認するのはそのためだ。今のはタスクの内の一つ、生徒会技術部(※ハルマゲドンのためロボ研を接收して設立された臨時部署)の部門長・“阿万上和臼”^{あまがみでうす}からの進捗報告と予算のすり合わせを兼ねた連絡であった。生徒会では現在、戦力にならない低級役員が生徒会室に居ながら戦闘に参加するための軍備、“生徒会・トレイグジスタンス・ロボット”^{エステー}通称“S T ロボ”の開発を急ピッチで進めている。

「失礼しました、会議を再開しましょう。それでは、お手元の—————

—————♪しろい～ マットのオ～ ジャー(↑)ング～ルウに～～

話はじめたタイミングで、再び電話が鳴る。虎子は苦笑いし、周囲は温かく電話をとるよう促す。「gau☆ gau☆ いつもお世話になっております。……ハイ。……おおっ！ それはおめでとーござい gau☆ ……ハイ。……ハイ。ふふふ、“フジキ”さん風に言うなら…そうですね、『もう1回遊べるドン！』…でしょうか？ ……ハイ。ご無事をお祈りする gau☆」

通話を終了し、虎子は上級役員達に向き直る。

「たった今、フジキさんから『暗殺クリアだドン！』との報せがあったドン！ ……じゃなかった、あった『gau☆』引き続き戦力削ぎの任にあたってくれるそうで gau☆ これで合計7名。フジキさんは今回の生徒会 MVP 候補の1人 gau☆」

朗報を受け、生徒会室が沸き立つ。フジキは裏応援団所属の闇討ちを得意とする魔人だ。既にここまで単独で7名もの番長魔人を葬っている。

わいやわいやとフジキの健闘を讃える雰囲気の中、みたび虎子の電話が鳴った。

しかし、—————

—————♪向っかいかーぜと～ 知っていなーがら～ それで～もす～すむ～…

そのメロディは今まで2回とは異なるものであった。

瞬時に虎子の顔面から血の気が引く。

電話をとることなく、呼び出し音を止め、早口言葉のような勢いで虎子は言った。

「会議の途中ですが生徒会の勝敗に関わる重大な問題が発生しましたので直ちに対処に向かいま

す。重坂さんすみませんが残りのスライドの説明をお願いします。」

副参謀に仕事を押し付け、了承の返事を聞く暇すら惜しんで、虎子は転がるように生徒会室を飛び出した。そして5階の窓から躊躇いなく身を投げる。ぐるりぐると空中三回転を決めるも勢いを殺し切れず、泥まみれになりながらゴロゴロと無様に着地。しかしすぐさま立ち上がり、口に入った砂利を吐き捨てる。

「邪魔ッ！」

ゴテゴテとして動き辛い虎耳や虎尻尾、グローブやブーツを脱ぎ捨て、虎子は駆け出した。

————— (あの着信音は自宅に仕掛けたトラップが作動した時に鳴る)

————— (誰かが家に侵入した)

————— (パパが危ない)

————— (間に合え 間に合え 間に合え)

■2:ゆにぼちゃんの家 (ゆにぼちゃん)■

とんでもなくからっぽな映画を見たせいで、ゆにぼちゃんはフラフラです。きのうからすごい高い熱がひかず、今はもうあついのかさむいのか分かりません。

がっちゃん、ぎぎぎぎぎー。

げんかんのさびたドアが開く音がしました。

「お邪魔する gau★」

どこかで聞いたようなこえです。あれはいったいだれのこえでしょうか。

(あれ、鍵かけなかったっけ?)

「お見舞いに来た gau★」

ゆにぼちゃんはまだろうとした意識のなかで、ナントカそのこえの主を思い出しました。あれはたしか、1年生の虎子さんです。

「うふふ。ありがとうっ！」

せっかくのお客さんです。ベットから起きあがるちからはありませんが、こえだけでも元気におもてなしました。

(あれ、なんで虎子さんはゆにぼちゃんの家を知ってるの?)

ぎゅむん。

虎子さんの指がゆにぼちゃんのほっぺをりょうほうから押し込みました。むりやり割り開かれたくちびるを目がけて、虎子さんのしんけんな顔が迫って来ます。

(え、え、え?)

これってもしかして、もしかすると……? イヤですおたわむれを。ゆにぼちゃんには心にきめたグソクさまがいるのです。でもすごい高い熱のせいで体がぐったりして振り払えません。

これはいけません!

くんくんと鼻をひくつかせた虎子さんは氷のようにひんやりとしたこえで言いました。

「合致」

とんてんかんとんてんかんっ! メーデー! メーデー! あぶないよっ!

ゆにぼちゃんのアルバイトで培った介護シックスセンスが最大級の警鐘を鳴らしました。

■3:虎子の自宅■

帰宅直後、最優先で父の無事を確認した虎子はひとまず安堵した。そして少し冷静になった後、決別したはずの父に対しここまで必死になってしまった自分のどうしようもなさに気付いて、力無く笑った。

父をいつも通り“手入れ”した後、仕掛けてあった監視カメラの映像を確認した。家のいたるところに仕掛けた100点を超える監視カメラ・センサー・ブービートラップのうち7割近くは解除もしくは無力化されてしまっていたのだが、3重4重に設置された隠しカメラのうちいくつかは辛うじて生き残っていたのだ。(なお、虎子のスマートフォンを鳴らしたのは床下に仕掛けられていた重量センサーである。)

そして、その映像から犯人にあたりを付けた。見知った人物だった。^{かりそめ}仮初の仲間だった。

その人物は、介護戦士だった。

被介護者を和ませる愛らしさと、効率性が同居した介護ムーブ。幾重ものブービートラップを事もなげに回避・発見する介護シックスセンス。吐瀉物^{としゃぶつ}をまき散らしながら、もだえ転がりながらも決して絶やさぬ介護スマイル。瀕死の状態にありながら自分のまき散らした吐瀉物処理・施錠を怠らない介護メンタル。どれをとっても一線級の介護戦士のそれである。

—————（貴重な戦力だったのに、残念だ。）

虎子はそう思った。

パラパラと父が遺した兵法書^{へいほうしょ}“虎の子の虎の巻”をめくり、拷問の項を読み返す。一線級の介護戦士から“訪問介護”を依頼した者の情報を引き出すのは骨が折れるだろう。

『誰にも教えていない虎子の自宅にどうやって到達したのか。』

『誰にも渡していないはずの合鍵をどうやって入手したのか。』

『その人物の介護戦士というジョブ。』

『映像中の様子。』

それらを総合的に判断し、虎子は依頼人の存在を確信していた。秘密にしていた父を見られた以上、実行犯は元より計画犯にも然るべき処置をしなければならない。

入念に身支度を整えた後、虎子は床に顔を近づけた。今は拭き取られて綺麗になっているが、侵入者の吐瀉物のあった場所だ。鼻をつく酸っぱさに僅かに混じる甘ったるい臭いを虎子は記録した。虎の子の虎の巻にはこうある。

『対魔人捜査は一つの証拠をあげただけで満足してはいけない。コピー能力、洗脳操作能力、情報改竄能力、認識の改変能力^{エトセラ}、etc… それらがある以上、最低でも二つの異なる観点から証拠をpushさえるべきだ。そして、—————』

『『—————そして、二つの違う証拠をpushえた時はじめて、対象を疑って良い。』』

奇声をあげる父の背に向かい、虎子は大好きな金言を暗唱した。

「それじゃあ、行って来るガウ☆」

■4:ゆにばちゃんの家■

「合致」

—————虎子から漏れ出した殺気を受けて、ゆにばの介護スキルが発動する。

—————“介護シックスセンス”のアラートが“介護出力系統”を緊急作動させる。

『介護戦士はコンディションに依らず出勤する必要がある。』

ベッドの上を猛烈な勢いで転がり、窓際まで退避。回転の勢いそのまま、体を巻き上げるように起こし、低く腰を落とし拳を構える。

“ドレミファソラシド”

低周波ナックルがフルチャージ！

『介護戦士はいついかなる時でも出勤に備える必要がある。』

—————高熱と悪夢に苦しみながらも、ゆにばは低周波ナックルを手放さなかった。

—————彼女がそれを手放す時があるとすれば、それは死んで骸^{むくろ}になった時。

ゆにばの視界を掛布団が覆う。

瀕死の獲物の思わぬ抵抗に動じることなく、虎子は淡々と次の手を打った。それは、虎子が蹴り上げた即席の目くらまし。

ガシャン！ リロード音とわずかな排煙と共に、低周波ナックルが中空へ放電。そして、緊急再充填！

“ド・ミ・ソ”

先ほどと違うチャージ音。

—————無暗に掛布団を殴っても仕方ないとゆにばは判断した。

—————卓越した介護戦士の緊急時における状況判断は適切だ。

ぱちゅん！

「……っ！」

ゆにばは拳を振るった。対象は自分自身。

掛布団が落ち、お互いの視線が交差する。

《慧眼》

虎子はバックステップでゆにばから一旦距離をとり、部屋にあったリモコンを拾い^{どうてき}投擲。

ゆにばに触れた瞬間、そのリモコンは木端微塵に爆発。視認できない速さで振るわれたゆにば

の拳がそれをなしたのだ。

————『身体の動作は電気信号によって制御される。』

————今、虎子が《慧眼》によって一瞬で看破^{かんぱ}したその能力応用は、『自身の体に微弱な電気を流すことで単純な命令式を与える』というものであった。

————その命令式は、『触れたモノを殴れ』。

————もし虎子がナイフで仕掛けていたならば、彼女は挽肉になっていただろう。

再び虎子は投擲。次は文庫本。

ぱしんと、ゆにばはそれを受け止めた。その動作に先ほどのようなキレは無い。

————（待ち受け回数「1回」!）

何かを確信した虎子が隠しナイフを取り出しベツトへと飛びかかる。

“ドレミファソラシド”

それを迎撃すべく、連続充填。使用要領を無視した扱いに、低周波ナックルが悲鳴をあげ高温を発する。灼け焦げるゆにばの拳！しかし、その顔には介護スマイル！

《^{おう きゅう たい しょ} 応 急 対 所 —————

《^{ス カ ー レ ッ ト} 傷 っ だ 赤 の —————



両魔人が能力を繰り出そうとした瞬間、窓に異形が映る。足、足、足、足、足、足、足。

「————ツ！」

《慧眼》

虎子は身を翻^{ひるがえ}して、部屋を出、戦場から離脱した。負けの可能性が高い戦いを彼女はしない。

それを見届けた後、ドサリと、ゆにばはベットの上に倒れ込み、そのまま意識を失った。如何に一級介護戦士といえども、急の休日出勤令は辛いのだ。

「お待たせしてしまって申し訳ございません。皆様の家を順にまわって詩を聞かせていたら、こんな時間になってしまいました。……しかし、今は何かお取り込み中でしたかな？」

窓の外の異形の呑気^{のんき}な言葉は、ゆにばには届いていなかった。

■5:某所■

「ココちゃんは大丈夫。シブキがいるから。大丈夫。何も怖いことはないわ。怖くない。大丈夫だから。本当よ。だから大丈夫。」

薄暗い部屋で少女は虚空に向けて呟く。

“訪問介護”の依頼人である彼女は、ゆにばに与えた虎の衣装に仕込んだ盗聴器で事の一部始終を把握していた。

「大丈夫。シブキがいるから。今回は失敗しちゃったけど。」

「必ず幸せにしてあげる。」

「ココちゃんは大丈夫。シブキがいるから。大丈夫だから。あら？ 誰も来ないわ。もう大丈夫。誰も見ていないわ。シブキ。シブキ。怖くないわ。嘘じゃない。」

「そうだ、シブキの命をあげる。」

「大丈夫、ココちゃんは大丈夫。」

探偵Gの事件簿～せいきの大泥棒編～ガウ☆

ここはダンテ探偵事務所。今日も今日とて仕事はなく、私は仕事の一つである掃除をしているのだった。クラシックなメイド服に着替え気分もバッチリ！

つーッ

「あらここにもこんなに埃が！ 良子りょうこさんちゃんと掃除をしてくださる？」

くるっと回って移動！

「す！ すいません義母様おかあさま！ 今すぐに綺麗にしますので！」

くるっ！と回って立ち位置を元に。

「んまっ！ 貴方に義母様と呼ばれる筋合いは……」

トウルルルルルルル

あら電話です。ととと、と電話の元に行きガチャッと受け取って

「はい、こちらダンテ探偵事務所です！」

うーんまさしく助手！ですね！

「いいいいE子いーこさんですか！？」

この声は学校の後輩である十葉とやくシブキさんです。

「あ、シブキさん。そんなに焦ってどうしたの？」

「E子さん助けて下さい！ 友達の……友達のココちゃんが！」

メイド服のまま急いでシブキさんに言われた公園にいくと、おどおどとしたシブキさんとシーツをまとった虎子さんが！

「何があったの！ シブキちゃん！」

「ココちゃんが……切られてるんです」

虎子とらこさんとは虎耳虎柄のグローブと虎づくしに染まったまさに虎になった女の子なのです。明るくて、でも賢くて、快活で気兼ねなく話せる良い子なのです。ちなみに私の名前は良子なのです！私も実は良(い)子なのですよ！

「そんな！ 虎子さんは無事なんですか！？」

「ココちゃんは怪我無いんですが……大事なものがなくなっているんです！」

どどどどうということなの！？

「これは事件の予感がするな！」

にゅっと出てきたのはダンテさん！ いつの間にか探偵服に着替え右手にはパイプのようなものも

構えています。

「どうい状態だったのか教えたまえ雌犬ほっちビッチ」

相変わらずダンテさんはひどい事を他人に言います。

「わわわわ、私のことですか？」

「お前以外に誰がいる雌犬ほっちビッチ」

「ひいひい」

シブキさんが怯えています！ 流石にこれは物申さないといけません！

「ダンテさん！ シブキさんには私や虎子さんがいるんですよ。友達の居ないダンテさんの方がほっちじゃないですか！ それに、ビッチというのは雌犬の事を指すのですよ？ それだと重言じゅうげんになってしまいます！」

「やかましいぞこのクソ雌豚淫乱ビッチが、それより早く状況を教えたまえ」

この人全く反省していません！

「ココちゃんとは始業式の最中に話しかけられた頃からの付き合いで、今日も虎子ちゃんと遊ぶ約束をしていたんですけど、いつまで経っても約束の時間にこないのですおかしいなあと行って家に行ったら……身体中切られた痕あとだらけで倒れてたんです！」

「そうだったのガウカーガウ☆」

虎子さんが心配そうに話を聞いています。

あれ？ 虎子さん？

「虎子さん無事なんですか！？」

「無事ガウ☆」

あざとい猫のようなポーズを取る虎子さんに驚く私に向かってシブキさんが補足します。

「あっ、切られた痕はあったのですが切り傷はなぜか一つもなかったのです」

ダンテさんが確認します。

「けがなかったということか？」

「はい、けがありませんでした。ですが、その、おまたの部分にも何も無かったのです！」

シブキちゃんが言っちゃったとつぶや呟きながら顔を真っ赤に染めてしまいます。可愛い。

「まんこがなかったのか」

「ほ、本当だ！……ガウ☆」

虎柄パンツを脱ぎながら虎子ちゃんが自分で確認しています。

って、ここは公園です！ そんなことはしちゃいけません！ いや、見せちゃいけないものは付いて

ないので問題ないのでしょうか？ 不思議です。

「ふむ、面白い。本当になくなっているではないか」

とパイプのようなもので虎子ちゃんの股間をぽんぽんと叩きながらダンテさんが興味深げに言います。

「ダンテさん！ やめてください！」

「ふむ、これは恐らく……何者かにまんこを盗まれたのだ！」

「盗まれたって、それに何者かって誰ですか？」

「それを探るのが俺たちの仕事だろう。おいこの……なんて呼べば良いのかわからんな」

男の子でも女の子でもない虎子さんにダンテさんはどう接すればいいのかわからないようです。

困ってる姿は珍しいですね。くすくす

「ええい！ この虎キチ阿呆^{あほう}め捜査の基本だ、昨日の行った場所を教えろ」

「昨日は……転校生のマリアちゃんのところまで壁を借りて修行をしていたガウ☆」

このマリアちゃんというのは真壁^{まかべ}マリアさんのことかな？ 人を遠ざけてるタイプの子なのによく修行に付き合ってくれましたねえ。

「なるほど、よし！ 真壁のところに行くぞ！」

「行くガウ☆」

というわけでやって来ました真壁さんのお家！ 失礼かと思いましたが私にはダンテさんと虎子さんを止めることは出来ません。

「真壁マリアはどこだ！」

ダンテさんは家の前で大声で呼んでいます！ 恥ずかしいのでやめてください！ ですがそれ以上に大きな声がするのです！

「ヤァーッ！」

「あそこから声がするぞ、あつ、あつ！ ウツ……ふう、あれはなんだ！」

ダンテさんが何かを見つけたようです。そこには思いもよらない光景が広がっていました！ それはともかく歩きながらのオナニーはやめて欲しいです。

「ヤァーッ！」

そういって人10人分の高さはあるような壁を一気に壊しているのは紛れもなく同級生の^{おのではる}斧寺春さんです。

「次の壁をお願いします！」

「も、もう勘弁してください」

そう転校生のマリアさんは涙目で懇願こんがんしています。いや、もうすでに泣いているかもしれません。

壁に囲まれた場所が好きな子なのですが壁を作っては片っ端から壊されていてとても可哀想です。

「あ、あれは虎子ちゃん！ 良子さん達もどうしたんですか。一緒に特訓します？」

「増えた……うあああああああん！」

気づかれてしまいました。そして、もう限界だったのかマリアさんは走り去ってしまいます。お達者でー

「虎子ちゃん大丈夫だった？」

斧寺さんが尋ねます。

「ふう……やはり貴方が昨日……」

ダンテさんは斧寺さんがいるということを薄々わかっていたみたい？

「はい、昨日私と虎子ちゃんと一緒に修行をしていたのです」

そして斧寺さんは昨日起こった事を話し出しました……

—

実は虎子と斧寺は週に三回修行と称して色々な物を壊していた。最近では真壁マリアの下で修行を熱心に行っている。

「ヤァーッ！」

ドカーン

「ガウ☆」

どカーン

「真壁さん！ 次お願いします！」

「ひえええええ……」

怯えながらもお願いされた真壁マリアは壁を作り続ける。かわいそう。そしてそれを壊しながら二人は自分の力の限界を感じていた。

「くっ……このままじゃ番長達には勝てない！ これがわたしの限界……いや、壁！ ……壁なら壊せる！」

そう斧寺春の能力は壁を壊す能力！ 自分の限界という壁すら壊せるのだ！

それに気がついた斧寺は斧を自分に向け……

ズパッ！！自分を切り壊したのだ！

そして、それを見ていた虎子もまた自分に限界を感じていた。

「このままじゃ私はパパみたいになれない……」

そうして何かを決心したような表情で斧寺の方を向く。

「春ちゃん……！お願い……私の限界も壊して！」

「虎子ちゃん……ダメです、失敗するかもしれません。失敗したらどうなるか……」

「いいの……ガウ☆ 春ちゃんならなんでも任せられるから」

「……虎子ちゃん震えていますよ。本当にいいのですか？」

「お願い！ 決断が揺るがないうちにはやく！」

「虎子ちゃん！！！」

—

「そして性器と共に性別の壁を壊されてしまったのか……」

衝撃の事実に啞然とする皆に斧寺さんは頬をかきながら、

「ちょっと間違えちゃいました！」

と照れています。

渦中の虎子さんは、

「限界も壊れたから結果おうらいガウ☆」

と嬉しそうにぴよんぴよんとあざとくジャンプしながら喜んでいるのでいいのでしょう。

そして、シブキさんも宣言します。

「わわわ私も……わたしもココちゃんと一緒に修行します！」

それらをかたわらで生氣のない顔でつまらなそうに見ながらダンテさんはこう呟くのです。

「は一あ、こんな事件じゃあ骨折り損の分だけ請求しないとな」

「けがなくて良かったガウ☆」

どっとはらい。

(Written by 霊)

わいせつ 猥褻の一切無いパンツSS「ガールズ&パンツァー」(前編)

青空の下——2階のベランダにてクマ吉は他の洗濯物と共に春風に揺れていた。

数時間日光を浴びてもう水分は乾ききっており、後は帰宅したご主人様——^{おのではる}斧寺春に取り込んでもらっただけだ。今夜、風呂上がりの春はまたクマ吉を^は穿くのだろう。それが彼には至上の喜びだった。

風に揺られ、青空と芝に覆われた庭を交互に見上げたり見下ろしたりしながら、クマ吉は存在しない胸を期待に膨らませていたのだが、突然吹いたひととき強い風がその期待を台無しにする。

パチン、と鳴って彼の身体は洗濯バサミから宙に放たれ、ふわりふわりと草の上に舞い落ちるも、この時点では特に慌てていなかった。

こうしたことは今までにも間々あったが、春がすぐに気付いて取り込んでくれていたから。先ほどまでと変わらずただ彼女の帰宅を待つだけでいい。ここまでは、そう思っていた。

「にゃ～ん」

塀を乗り越え現れた^{ちんにゅうしゃ}闖入者——1匹の猫に、クマ吉は初めて恐怖を覚える。猫に^{にら}睨まれた熊、弱肉強食は完全に逆転していた。

猫はクマ吉のところまで歩み寄ると鼻先を近づけてスンスン、クンカクンカと匂いを嗅ぐ。羨ましい。

そしてさらに、猫はクマ吉にとっては最悪の行動に出る。彼を口に啜えたのである。クマ吉の非実在心臓が激しく鼓動し、概念上の汗が滝のように噴出した。

クマ吉を啜えた猫はそのまま庭を何度か^{まわ}周ると玄関から出て行き、塀の上や路地裏を通って斧寺家から数百m離れた和風邸宅にたどり着く。^{ししおど}猪脅しにも池の鯉にも興味を示さず庭を通り、そこに面した縁側の上に飛び乗る。

猫はこことはまた別な家で飼われているのだが、時折抜け出してこの家に遊びに来ていた。家人は猫を見つけると食べ物をくれるし、特に2人の娘はよく遊んでくれるので、猫はこの家が好きだった。

猫が口から離せば、クマ吉がパサリと落ちる。猫にとって、クマ吉は彼女らへのプレゼントだった。飼い主に虫や小鳥を捕って献上する猫は多いが、よく「こうしたもの」を穿いている彼女らはきつと気に入ってくれるだろう、と考えたのである。

自分に尻を向けて廊下の向こうへ遠ざかる猫にクマ吉は安堵するが、同時にここから斧寺家へ戻る手段はあるのか、と絶望的な気分になる。

晒された怒りが宿っていた。

(シブキ……それは悪手)

実は知性派の虎子は心中でそうつぶや呟いた。

次のターゲットがシブキになるというのもそうだが、「お前は出来んのかよ、おー!？」という反論は相手が実際にやったらその行為を許すことになってしまうのだ。

「おーいいぜ、アタシのパンツは誰に見せても恥ずかしくねえからなあ。ほれ」

虎子の危きぐ惧通り、多田(30)が自分のスカートの裾を両手で持ち上げる。

姿を現したそのパンツは……

((((婆ばばくさ臭っ……!!)))

見ていた全員が口には出さずそう思った。ベージュの、覆っている範囲がやたら広いパンツ。30歳なことを考えてもアレである。

(確かに男を誘惑してる感じじゃないけど……むしろ萎えさせそうだけど……)

(高校生らしくは全然無い……ガウツ☆)

そんなことをしている間に2年生の風紀委員・守口もりぐちえいこ衛子が現れたため、多田の朝の独裁は終わりを告げた。



とやく
十薬シブキ

——放課後、生徒会室。

「多田先輩の横暴ぶりには困るね。庇^{かば}ってくれたシブキもあやうくパンツ見られるところだったガウツ☆」

「あー、あのババアウゼえよな」

虎子が今朝の多田について愚痴^{ぐち}れば、一巻九四もマスク越しのハスキーボイスで同意する。多田は普段の言行^{げんこう}から1年生には嫌われており、また、上級生も彼女にいびられた経験を持つ者が多いため評価は同様だった。

「ココちゃん、平気だった？」

「大丈夫ガウツ☆ シブキはパンツ見られなくてよかったガウツ☆」

仲睦^{なかむつ}まじい2人、それを見つめる1人の少女がいた。

「多田さんがウザいのは確かだけど～別にパンツくらいどうでもよくない？」

人造黒ギャル・機動^{きどう}乙女^{おとめ}アストレアはそう言った直後、自身の言葉に従ってべろりとスカートを捲^{めく}てみせた。アダルティな黒の紐パンで、シブキはきゃつと顔を赤らめる。

「わー、アストレア先輩大人っぽいガウツ☆」

「な～んかあ、マスターが用意するパンツが全部これだから穿いてんだけど、これってえろいの？」

「えろいですけど、アストレアちゃん、女の子が下着を自分から見せるなんてダメですよ。今生徒会室が女子だけとはいえ」

身体に巻き付く触手の目を手で覆^{ゆめさこかなめ}った夢追中^{たしな}がそう窘^{たしな}めるが、それを聞いた面々は「あんたに言われたくないわ」と思った。何しろお嬢^{かんざき}さん・姦^{きりいぶ}崎^{いぶ}が胸と下腹部を覆^かっているとはいえ、全裸である。全裸！！

「夢追先輩、呪いで服が破けちゃうって聞いたけど、その前はどんなパンツ穿いてたんですガウ？」

「私のパンツですか？ それは……」

「……クマ吉君……」

隅の席に腰掛けた1年生・斧寺春の小さな呟きは、しかし酷く沈痛な響きがあった。

盛り上がるパンツトークに、春は昨日行方不明になった最愛のパンツ「クマ吉君」のことで胸を痛めずにはいられなかった。

帰宅後、母が干したはずの洗濯物の中にクマ吉君が無いことに気づき、庭や風で飛んだ可能性のある隣家を探しても見つからず、お風呂で泣き、ベッドで泣き、泣き疲れて眠りに落ちて気づいたら朝になっていたのだ。町内の電柱や掲示板に張り紙をして情報を待っているが、見つかる見込み

はまず無いだろうと母や姉は言ったし、春自身も、客観的に見れば望み薄とは思っていた。

それでも、なんとしても見つけたかった。意味があるのかわからないが、「願掛け」もした。

窓の外の校庭では30人の桜縁さくらゆかりがアンスコが丸見えになるのも厭わず応援練習をしているが、その応援も春の心には届かない。

目に涙を浮かべる春に事情を尋ねた生徒会女性陣はその涙の理由を知り、知らぬこととはいえ彼女を傷つけてしまったことを恥じた。そして、自分たちも協力してクマ吉君を探そうと申し出たのである。

「あ、ありがとうございます皆さん。でも、どうやって……？」

「失礼します」

ちょうどそこに入ってきたのが、菱夜良子ひしよりようこ——探偵Gの秘書「E子」ジーを務める少女である。なんというご都合主義的タイミングの良さ！

「……パンツ探し、ですか？ 人や犬猫なら経験はありますが、なかなか奇特ですね……。それに、ダンテさんは最近事件続きで赤玉と血尿が出てしまい、今は療養中です」

「お願いしますっ！ 私なんでもしますから！ 絶対にクマ吉君を見つけ出したいんです！！」

話を聞いて芳しくない反応を示すE子いーこに春は泣きついた。豊満な胸元で目に涙を溜め、懇願する幼気いたいけな少女。その言葉にE子はびくりと反応する。

「なんでもします」、つまり、金銭による謝礼など要求しても全く問題無いだろう。今回ダンテはいない。報酬は独り占め出来るのだ。貧乏な彼女には願ってもないこと。

「わかりました。私も探偵の秘書を務める身。ならば、探偵がいなくとも事件に立ち向かわなくてはなりません」

力強い宣言に春も他の面々もE子を頼もしく感じた。

「オカズなら、私のパンツでいいガウ？」

「……ココちゃんは見せちゃダメ。私のでいいですか？」

露わになる虎子の虎柄縞パンとシブキの水玉。E子は「私にもオナニーして捜査のイメージがついてるのか」と頭痛を覚えた。

春は股間を押さえ、そしてクマ吉君のクマさんプリントを頭に思い浮かべる。

(待っててねクマ吉君。犯人を捕まえて、あなたを取り戻してみせる……！)

— 後編に続く —

(Written by サンライト)

無題(コブラ部隊コピペ)

「この先にはわが生徒会と 魔人能力が待ち構えている さあ、こいつ！」

「ようやく捉えたぞ 我らはザ・スマホの生徒会… 俺はジ・アストレア
おまえにこの世で 最高の賢者モードをやらう いくぞっ！」

「怒りだ！ 私はザ・キルワン
怒りの炎で貴様を焼き殺してやらう！ 若い芽への^{ふんぬ}憤怒だ！」

「ザ・ファントム、任せたわ」

「俺はザ・ファントム 貴様にまだ見たことのない 本当の恐怖を見せてやらう
俺の演奏の中で…」

「ザ・トラコ、いるの？」

「悲しい… 悲しい… ファントムは悲しい… 俺はザ・トラコ
ファントムが殺めた死者の悲しみを知るがいい」

「ザ・レイブは普段巻きついている 時がくればイチャイチャしている そして奴は…壁ドンだ」

「壁よ！ 聞こえるか ワシはザ・レイブ 貴様に本当のスキンシップを見せてやらう」

「これで5人そろったわね 今度は地獄の底まで一緒…」

^{きぼうさき}
「希望崎はもともとひとつだったのだ
引き裂かれた希望崎をひとつにする
そのためには力が必要だ 希望崎をまとめるに足る絶対的な切札が
それが生徒会 そしてカベクイグソクムシ」

(Written by ルフトライテル)

わいせつ

猥褻の一切無いパンツSS「ガールズ&パンツァー」(後編)

校舎の屋上はオレンジ色に染まっていて、そこにひとり仰向けで寝ているゆにぼちゃんのほっぺたもいつもより赤く見えます。

夕焼けはとってもきれいで、ゆにぼちゃんが工作中だったら、少し前までのゆにぼちゃんだったら、きっと「まつごのさけ」のおじいさんおばあさんを屋上に連れ出して見せてあげたいと思ったでしょう。

「夕焼け……赤……^{ひいろ}緋色……」

でも今のゆにぼちゃんには、そんなことはどうでもよかったのです。

「からっぽのえいが」を見て、侵入者の^{とらこ}虎子さんを撃退して、高熱に苦しんで……。もう熱は引いていますが、熱よりもっと大きなダメージを、あの映画はゆにぼちゃんの心に残していました。

ここ数日、ゆにぼちゃんは心がからっぽになってしまったみたいに過ごしています。ご飯も食べるし、トイレに行くし、お風呂に入るし、もちろんこうして学校にだって来るのですが、ただそれだけでした。お友達とお喋りしても、甘いものを食べても、心が動かないのです。生きていくために必要なことだけを、ただ機械みたいにしているだけ。グソク様の池にもずっと行っていません。

「まつごのさけ」でのアルバイトは1週間分のシフトがまだ残っていましたが、チーフにごめんなさいのお電話をしてお休みをもらっています。もうこのままやめてしまおうか、とゆにぼちゃんは思っていました。

「へっくちっ！」

ゆにぼちゃんの耳に、かわいらしくしゃみの声が飛び込んできました。声のした方を見ると、黄色いレインコートのすそから細っこいあしが伸びていて、そしてひゅうと風が吹くと、その付け根をおおっている白い三角が見えました。真ん中にかわいいカエルさんが描かれています。

「あめふりちゃん……」

「やあ、ゆにちゃん！」

うりゅういんあめふりちゃん——ゆにぼちゃんのお友だちで、晴れの日でも学校の中でもいつもレインコートを着ている変な女の子です(ゆにぼちゃんもいつも体操着ですが)。

「どうしてここに？」

「『どうして？』って、今日勉強会の日だよ！」

「あ……ごめんなさい……」

あめふりちゃんはようち園の先生になりたいのでそのための大学に行きたいのですが、あまり成績が良くないので、お勉強のできるゆにぼちゃんに毎週教わっているのです。

毎週のやくそくごとを忘れていたゆにばちゃんにぷく一つとほおを膨らませたあめふりちゃんですが、様子がおかしいことに気づいて心配そうな顔になります。

「ゆにちゃん、最近変だよ。どうしたの？ いやなこととかあった？」

あめふりちゃんとゆにばちゃんがお友だちになったのは、あめふりちゃんがおもらしをしてしまったとき、ゆにばちゃんがいやな顔ひとつせず、それどころか笑顔でおしっこを拭いてくれたのがきっかけでした。

あめふりちゃんも、最近元気の無いゆにばちゃんに、何かしてあげたいと、優しいゆにばちゃんに自分も優しくしてあげたいと思ったのです。

「いやなことってどうか……。なんかどうでもよくなっちゃった……」

うつろな笑いをゆにばちゃんは浮かべます。「介護スマイル」は作り笑いも多いのですが、今のゆにばちゃん的笑顔は見ているあめふりちゃんが泣きたくなりそうなものでした。

あめふりちゃんはさらに何があったのかたずねました。がらにもなく真剣な目に、さすがに心を動かされたのか、どうでもいいと思っているから流されたのか、ゆにばちゃんにもわかりませんが、とにかくゆにばちゃんは語り始めたのです。「からっぽのえいが」について。

——生徒会室。

中心では探偵秘書E子——^{イーゴ}菱夜良子^{ひしよりようこ}が、机の上のコピー用紙に視線を落としている。それはE子初めての依頼人^{おのではる}・斧寺春が描いた、彼女の自宅とその周辺の見取り図であった。

「他の洗濯物と共に、そのクマさんパンツもここに干されていた。それで間違い無いですね？」

「は、はい……」

ベランダのあたりを赤丸で囲うとE子は春に情報を確認し、春も首肯する。

「昨日は特に強風情報などありませんでした。たまたま、多少強い風が吹くことはあってもそれで見つからない距離まで飛んでいくというのは無いでしょうね」

「やっぱり、下着泥棒なんですね……！？」

早とちりで思い込みの激しい春はそう言うが、E子は首を振った。

「無くは無いですが、可能性は低いと思います。この見取り図で見ると、ベランダはそれなりに広い庭に面していて、隣家とは距離があります。この状態でベランダによじ登り犯行に及ぶのは、ご近所に見つかって通報される可能性があまりに大きい」

なるほど、と斧寺も他のメンバーも頷く。E子が下着ドロの線を取り下げはしないのは、スリルを求めて不必要なリスクを冒す犯罪者がそれなりに存在するからだ。ただ現状では確かめようが無い^{もつと}。尤も、それはE子の推理も同様なのだが。

「風で飛んだのではなく、ズルルッ……下着ドロの線も薄い……チュルチュル。じゃあ、他に春さんのパンツが消えた原因が何かあるんです？」

名古屋名物味噌^{すず}そうめんを啜りながら^{じゅうざか あ ゆ か}重坂阿諛香が問う。パンツはレース付の白。見せるパターンが思いつかない。

「ええ、私のも推測に過ぎませんが。この先は現場に出向いて確認しましょう」

重坂にそう答えると、E子はスマートフォンを取り出してどこかに電話をかけた。

「からっぼのえいが……ゆにちゃんはそれを見たんだ……」

あめふりちゃんも、魔人警官のお兄ちゃんからその映画の存在は聞いていました。名前を呼ぶことさえ恐れられ、「紅の章」と呼ばれる、悪魔の映画なのだと。

ホラー映画を見ただけでおもらしてしまふあめふりちゃんに、ゆにぼちゃんの苦しみがどれほどかは想像もつきません。だから映画についてどうこうとは言えないけれど、なんとかゆにぼちゃんの苦しみを癒してあげたいと思いました。

「ゆにちゃん、その映画はからっぼでもさ、世の中楽しいことがいっぱいあるよ。からっぼじゃない映画を見よう。美味しい物食べよう」

そう訴える友人を前に、ゆにぼちゃんの表情は^{うつ}虚ろなままです。

「楽しいことも、美味しい物も、どうでもいいんだよ。何があったって、どうでもいい。ボクも、誰も彼も、どうでもいい」

「どうでもいい」というのはもしかすると救いかも知れません。どうでもよくないからこそ、手に入らなかったり、失ったりすれば、辛いのです。心がからっぼなら、「からっぼのえいが」にもきつと壊されることは無いでしょう。

「ボクももう、からっぼなんだ……」

ゆにぼちゃんのその言葉からすこしの間を置いて、あめふりちゃんが言い放ちました。

「ボクも見るよ！ その『からっぼのえいが』」

「……え？」

「ゆにちゃんの気持ち、やっぱりわかんないもん。ボクも見て、自分の心がからっぼになるかどうか、わかってから、もう1回ゆにちゃんを……」

「バカ！！！」

ゆにぼちゃんは勢い良く立ち上がって、あめふりちゃんのレインコートの襟元をつかみました。いつも介護スマイルだったゆにぼちゃんが、声も表情も、今は本気で怒っています。

「ボクみたいになって、どうするの！？ 次そんなこと言ったら、電気パンチするよ！ あめふりちゃんまでからっぽになっていいわけ……」

そこまで言って、ゆにぼちゃんは息を呑みました。あめふりちゃんは泣いていたのです。ゆにぼちゃんが怖かったからではありません。うれし涙でした。

「よく……言うじゃない？ 『自分を大切に出来ない人は人も大切に出来ない』って……。ゆにぼちゃん、ボクにこ、こんなに怒ってくれるんだから、ボクのことはどうでもよくなくて、自分もどうでもよくないんだよ……」

「……っ」

「怒らせること言ってごめんね……。でも……」

あめふりちゃんはゆにぼちゃんに抱きついて、わんわんと泣きました。

ゆにぼちゃんは思い出していました。胃の中のものをすごい勢いで床に吐きながら、虎子さんのお父さんにはかけないようにと、がんばったことを。あれはこれまでの介護戦士の訓練で体に染み付いた動きだからというのもあるのですが、しかしあんな大変な苦しみに、反射だけで耐えられるのでしょうか。

「ボクの方こそ、ごめんなさい。どうでも……よくないみたい……」

そう言って、自分と同じく小さな体を、ゆにぼちゃんはぎゅっと抱きしめました。

いつの間にか、^{たいたい} 橙と^{あいろ} 藍色が混じった雲から、雨が降り出します。

あめふりちゃんの魔人能力「あまんちゅ！」は心を癒す^{いや} ゆとり粒子を雨と共に降らせる能力です。

しとしとと降る優しい雨粒は、含まれるゆとり粒子の輝きで、目を凝らしてようやく気づくくらいの、ぼんやりした光をはなっていました。

校舎の壁に爪をひっかけてのぼってくるグソク様に、2人が気づくのはもう少しだけ先のことです。

「あ～留守番ってだるいですねえ。サボっちゃおうかなあ」

ハードカバーの本を読みながら、留守番を頼まれた暗殺者・フロレンツィア・ビブリオテークは腰掛けた椅子の背をギシギシッと安楽椅子のように傾ける。スカートの裾から、ドロワーズがちらりと覗いた。

——斧寺家前にて。

「小雨ですけど、降ってきましたね」

「そうですね……これじゃ『来ない』かも知れませんね。春さん、捜査を続けますか？」

「お、お願いします。他の皆さんは家に入って休んでてください。でも私は、一刻も早くクマ吉君

を……」

春の決意にE子はフツと笑い、持ってきた革袋に手を突っ込んで……取り出したのは1枚のパンツ！ しかも、クマさんパンツ！

「これはダンテさんから預かってきた探偵七つ性具の1つ……その中でも『クマ吉君』に最も近い外見なのはこれでしょう」

E子はそのパンツを持って庭に入ろうとする……が、そのとき

「んにゃあん」

「あっ」

背後に歩み寄っていた1匹の猫がジャンプし、E子の手の中のクマさんパンツを^{くわ}啜え、^{かす}掠め取ったのだ。そして、この文字通りの泥棒猫はそのまま^{きつそう}颯爽と走り去る。

「ま、待てー！」

春が先頭になって追いかけて、他のメンバーも後に続く。

「E子先輩……最初から猫だってわかってたガウ？」

「犬猫か、或いはカラスなどの鳥だろうと思っていました。近所の人に見られることを恐れずあっさり侵入し、且つ庭に入り込んでも人目につかない存在という、人間よりは動物ですからね。後者なら追跡はひと苦勞でしょうけど、^{われわれ}魔人の体力なら猫の追跡程度は容易です」

走りながら推理を披露するE子。揺れるFカップ。見え隠れする高校生らしからぬ紫の下着。

そして追跡は続き、2つ目の角を曲がった先で終わりを告げる。猫が立ち止まったのだ。

「あー、猫ちゃん。久しぶりだね」

猫を止めたのは、1人の小さな少女・^{うりゅういんあめふり}雨竜院 畢。畢と、その隣にいる、濡れた体操着を脱いで貴重な制服姿の^{ふくしのゆにぼ}福篠単波の姿を認めて追跡者たちは足を止めた。

「畢ちゃん、帰る途中？」

と、^{ゆめさこ}夢追。

「裏切り先輩！ 家は別方向のはずガウ☆」

と、虎子。勘違いは続いていた。

「ボクはお家でゆにちゃんと映画見ることにしたから。生徒会の^{みんな}皆、なんでここに？ 後、猫ちゃん。そのパンツは……」

頭に疑問符を浮かべる畢。猫は、啜えていたクマさんパンツを、畢の足元へ落としていた。まるであなたにあげますとでも言わんばかりに。

「あの幼女みたいな先輩に猫があげたってことは……つ、つまり」

春が畢を指差し、プルプルと震える。そのとき、神の悪戯か、はたまた大宇宙の意思か？

雨と共に吹きぬけた一陣の風が、ゆにぼと春のスカートを捲りあげた。

^{あらわ}露になる、ゆにぼの稲妻柄パンツと春のむき出しの股間！^{ほんそうこう}そこを隠すのは、1枚の絆創膏のみ！

「な、なんでノーパン……？」

「『願掛け』です。クマ吉君が見つかるまでの。これは^{そうこ}走りちゃんにももらいました」

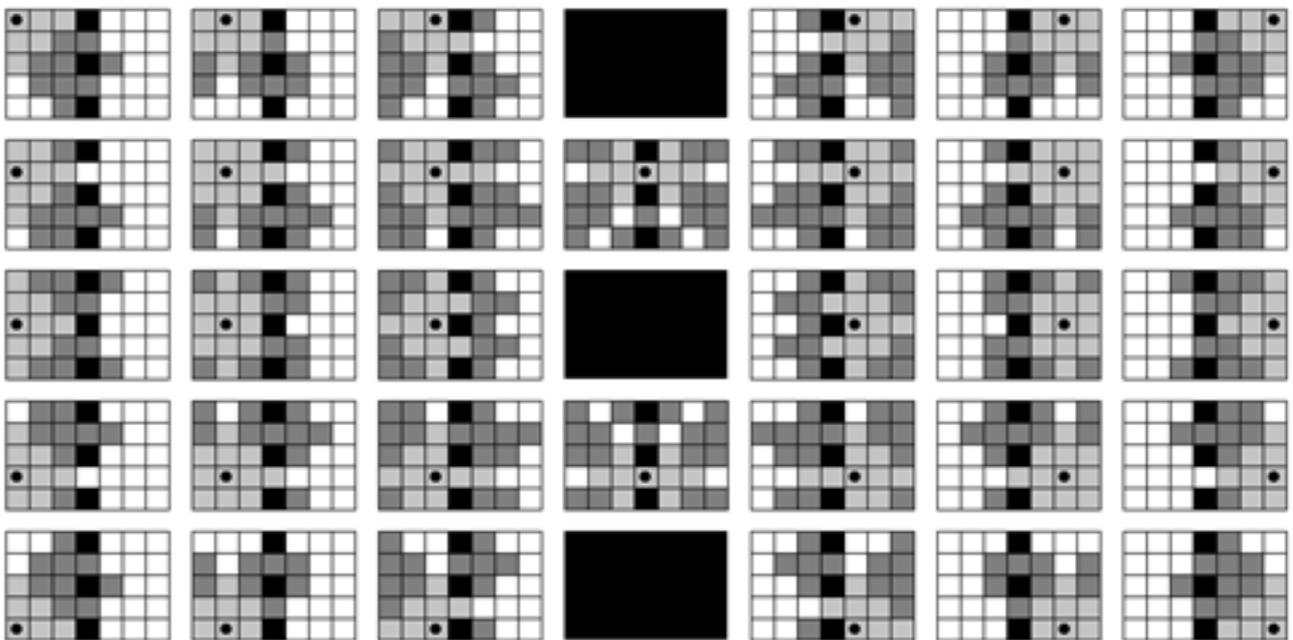
引き気味の周囲からの問いに、春は顔を赤らめて答える。

「もう、よくわからないけど、ダメだよ。女の子がノーパンなんて。ほら、ボクの貸してあげるから」

そう言うと畢はカバンから、いつも持っているおもらしに備えてのスペアパンツ——今日は股間にクマがプリントされた、春の最愛のパンツを取り出した。

(Written by サンライト)

特別図解・これが虎子さんの射程だ！ コワイ！



■ 虎子戦績 ■

ダンゲロス War & Wall (2013/6/22-23)

生徒会陣営：スターティングメンバー

第2T先手、通常攻撃により壁を破壊。

第2T後手、浪田漏太郎なみだろうたろうの能力『R P M』で4マス移動した柳協志リュウ・シエジーの通常攻撃を受け、死亡。

勝利陣営：生徒会

講評：2T先手の虎子の位置取りは、武者むしやポン子の射程外であり危険度は低かった。柳の奇襲はシークレットである浪田の支援をうけてのものであり、予測は極めて困難なものである。結果としては、能力発動や敵撃破などの顕著な戦果は残さなかった虎子だが、番長グループ陣営に死亡制約のシークレットを切らせたという意味では十分に役割を果たせたと言えるだろう。最優先で排除されたということは、それだけ虎子の能力が敵陣営から高く評価されていた証でもある。

ダンゲロス TAG2 一回戦 (2015/9/18-19)

チーム「レ・ザントウシャープル」(みやこ&ヌガー)：スターティングメンバー

第3T先手、通常攻撃により雨竜院死滅理うりゅういん しめりに10ダメージを与え体力を1まで減少させる。

第4T先手、通常攻撃により時々雨宮守ときしぐれくもりを殺害。能力『毒ヤモリさんだよ』によるカウンターの通常攻撃を受け、死亡。

勝利陣営：チーム「狩るにゃんエクスプレス」(しろは&ほまりん)

講評：「最強のふたり」の名に恥じぬ恐るべき強さを持ったチームの切り込み隊長として、対戦相手に多大なプレッシャーを与えた。広い射程に加え、機功人形シラハきこうにんぎょうによって全無効を付与することも可能であり、対抗することは極めて困難だった。レ・ザントウシャープルの敗因は偏ひとえにダイス運が圧倒的に振るわなかったことであり、少なく見積もっても9割勝てる攻めを展開していただろう。チューリッヒ、ユーフォリア、シラハが次々に能力失敗・通常攻撃失敗を繰り返す中、虎子は二度の通常攻撃を確定で決め、雨竜院に大ダメージを与え、時々雨を排除し、与えられた役割を十分以上に果たした。

■ 虎子エピローグSS ■ そして、

「やっど……やっど……。」

遮光カーテンで閉ざされた一戸建て住宅のリビングに、枯れた低い男の声。

昼間だというのに薄暗い室内。

その中央に置かれた52インチの薄型テレビに映し出される「劇場版 HUNTER×HUNTER
ファントム・ルージュ
緋色の幻影」。

テレビの前のくたびれた虎柄のハイセンスな1人掛けソファーに、脱力した様子で体を預けていた男性はリモコンを手にし—————

—————テレビの電源を切った。

—————2年間休むことなく、1万回視聴したその映画との決別。

そして男は立ち上がる。

「昨日辺りから頭が冷静になってきて、今日の“敗退”で遂に完全に目が覚めた気がする。この数年私は何をやっていたんだらう。悪い夢を見ていたようだ。」

“敗退”とは何のことであろうか。
前後不覚に陥っているのか、それとも彼は精神世界で何かと戦っていたのか……？

そんな男の背後に、虎のような奇天烈な出で立ちをした少女が—————

—————いない。

「るいこ涙子さん……？ みやこ都子さん……？」

最愛の妻と娘の名を呼ぶ。
返事は無い。

ちらかり放題のリビングを、ゴミを避けるように窓際まで移動し遮光カーテンを引いた男。
数年ぶりにその部屋に日光が差し込む。
明るくなった部屋を改めて見渡し、その雑然とした様子に男は首をひねる。

「これは一体……。」

陽に照らされた凍々しい表情は、前日までの曇ったものではない。
そこにあるのは魔人犯罪者達が名を耳にすることすら忌避する鬼の魔人公安、“炎の赤”の姿であった。

■ 虎子エピローグSS ■

そして、

■ “スカーレット炎の赤”プロローグSS ■

あとがき

2013年に開催されたダンゲロスWar & Wallは、私が初めて参加した本戦であり、非常に思い入れの深いキャンペーンです。本冊子にも多数登場しているように、様々な魅力的キャラクターがいましたが、中でも特に私の心を捉えたのは、みやこさんが投稿した「^{とらこ}虎子」というキャラクターでした。

虎子の誕生経緯を説明するには、まず^{ぎぼらみつよし}偽原光義の紹介をしなければなりません。偽原光義は、ファントムルージュによって心を蝕まれたスカーレットさんがダンゲロスSS3に送り込んだ恐るべき魔人です。虎を愛し、高い知性で尊敬を集めていたスカーレットさんでしたが、彼はファントムルージュという映画を見てしまったために正気を失ってしまっていたのです。

そんなスカーレットさんの病状を案じた(?)みやこさんが創り出したのが、虎子でした。中の人ネタとか大好きな私は虎子さんのことが気に入ったので、ゆにぼを突撃させることにしました。するとなんと！みやこさんが続きの物語を書いてくれたのです！これはとても嬉しい出来事でした。

そして、特筆すべきことは虎子さんの盤面上の強さ！斜め2マス射程怖い！TAG2で敵として対峙して、改めてその強さに震え上がりました。

そんなわけで、せっかくTAG2で虎子さんと再びご縁ができたので、この機に虎子さん関連の応援をまとめた小冊子を作成しました。物理冊子化にあたっては、改行などの体裁を紙媒体向けに修正しましたが、元テキスト作成者の意図に沿わない部分があったらごめんね。



オフ会の様子(?)：左、^{せいぞういんくりん}聖槍院九鈴／右、奥より^{はにいあしな}埴井葦菜、^{ゆめさこなめ}夢追中、^{とらこ}虎子

応援まとめシリーズ「虎子さんの虎の巻」

平成27年10月24日 初版作成

テキスト：みやこ、霊、ルフトライテル、サンライト、ほまりん

イラスト・編集：ほまりん



ダンゲロス・バーゲンセールより